「今日の説教、聴き手のために」　2013/9/1　明治学院教会（319）
（このプリントは毎週作っているものです）　　牧師　　岩井健作
『神に叱られる』　　サムエル記上４章１０節－２２節

１、今日の聖書、サムエル記上４章を四幕物の劇に見立ててみました。第一幕。イスラエルとペリシテとの戦争。先制攻撃をかけたイスラエル側が敗北します。戦力が違います。第二幕。イスラエルは神の臨在の象徴「神の契約の箱」をシロの神殿から戦場に運びます。神頼みの戦い方です。ペリシテ人は恐れますが、逆に士気を高めて応戦、またイスラエルの敗北です。祭司エリの二人の息子は戦死し、大事な「神の契約の箱」が奪われます。第三幕。伝令が戦場から、シロの祭司エリに敗北を伝えます。彼はショック死をします。第四幕。出産の場面です。息子ピネハスの妻は、この出来事のショックで早産に至ります。絶望的名前「イカボデ（栄光なし）」が付けられます。しかし、この出産の世話をした名もなき女性は、「恐れることはありません。男の子が生まれました。」と希望を告げます。劇は終わります。

２、ここから幾つかのメセージを聞き取ります。先ず第一に、戦争です。イスラエルの歴史は戦争の歴史です。結局は、国家が滅びます。申命記の歴史家は、その滅びのなかに意味を見出だします。国家（イスラエル）の栄光が究極的な価値ではありません。「剣を換えて鋤とする」は予言者ミカの言葉ですが、鋤で耕すことに、国家の在り方を象徴させます。軍事ではありません。今「日本国憲法」が聖書的価値観を象徴していることを深く思わざるを得ません。第二。「神の契約の箱」を戦場に、持ち出すことは、戦争への宗教利用です。靖国神社問題です。キリスト教の戦争協力です。『興亜讃美歌』（8/17東京新聞報）を借りて手に取ってみました（花島光男さん所有）。国家に呑み込まれた無残な教会の姿があります。第三。指導者エリの死を「年老い、太っていたからでる」（18）と、歴史家は相対化して描きました。私はここに神の裁きではなく、自己の名誉をしか考えないイスラエルへの神の叱責（神に叱られる）というメッセージを読みます。その徴として、第四に、戦争という夥しい人の死の話のなかに、たった一つ、新しい命の誕生の物語が語られています。創世記（35:17）のラケルが自らの命と引き換えに与えられた子、ベニヤミンの出産の時、付き添いの助産婦がいった言葉と同じ内容です。

３、ここは闇の中に光が、というイエス誕生（救い）の物語を想像させます。救いは「イスラエル（国家、人の名誉）の栄光」が去ったところで「神の栄光」として、幼子の誕生の物語りによって告げられます。「叱られること」は「裁き」ではなく、信頼の表現です。「救い」の想起への促しです。歴史認識への喚起です。私たちの現状も、権力の放縦、多くの民衆の蒙昧、わが身の無力、何時の世とも同じ厳しい現実に投げ込まれてはいます。しかし、神に目を向ける時、諸般の出来ごとに「神に叱られている」という叱咤を受け取って、「救い」の確かさを信じ、くじけないで、お互いに励まし合って、現状の闇と闘って生きようではありませんか。